

編集後記

ここに、学内教員の皆さん、学位授与者の皆さん、その他関係する方々のご協力により、年報第16号を発行することができました。

2011年は3.11の東日本大震災、津波、原発事故に翻弄された年でした。現実とは思えない映像や切迫した報道に茫然とし、自然の力の大きさと文明の暴走に恐怖を覚えながらも、それに立ち向かう被災者の方々の救援活動、ボランティア活動の姿に、「何かしなければ」、という思いを誰もが持ちました。本号では、「さまざまな災害に立ち向かう環境科学」を特集記事としました。寄稿論文のリストを見ると、震災の復興に直接関連したもの以外にも、環境科学部がさまざまな自然災害や人災にも働きかけることができる、ということがわかります。大学人として、環境科学は人間を中心に据えた学問ではなく、人間の存在を調和させ持続させるための学問であることを改めて認識した一年であったのでは、と思います。

編集を終えた今でも、被災地は復興にむけてようやく動き出したところです。放射能はいまだめども立たず、収束まで20年、30年という気の遠くなる時間が示されているだけです。物理的なものだけでなく、精神的に立ち直るまでにはまだまだ時間と労力、資金が必要とされます。私たちもそれぞれの立場で「何かしなければ」、「何ができるか」、そして「どのようにすればよいのか」、を考えていきましょう。

学部報の収録期間は本号まで1月から12月まででしたが、次号から年度に合わせることになりました。そのため、第17号(2013年発行予定)は2012年1月から2013年3月を、それ以降は4月から翌年3月までを収録期間とする予定です。

環境科学部年報委員会

委員長 須戸 幹
委員 後藤 直成 (環境生態学科)
高橋 卓也 (環境政策・計画学科)
高田 豊文 (環境建築デザイン学科)
皆川 明子 (生物資源管理学科)

環境科学部 環境科学研究科 年報第16号 **さまざまな災害に立ち向かう環境科学**

発行日 2012年3月31日
発行所 滋賀県立大学環境科学部
〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500
Tel 0749-28-8301
発行人 布野 修司
印刷所 富士印刷株式会社

表紙写真

左上:震災半年後の仙台市宮城野区沿岸(須戸提供)
左下:旧朽木村における森林伐採後の植林(籠谷氏提供)
右上:「竹の会所」プロジェクト(陶器氏提供、本文参照)
右下:平成2年豪雨による犬上川橋被災状況(滋賀県提供)